

京極読書新聞

<第65号>

発行日 平成27年3月1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

各学校より

1年間を振り返って…



南京極小学校

仲野 藍 (なかの あい)

「あの本、面白そう!」「絶対借りて読もう。」毎月出前図書の後には必ず子供達からそんな声が聞こえてきます。そして、嬉しそうに本棚から本を探す姿はとても微笑ましいです。これは、湧学館の方のブックトークがとても面白く、それぞれの本がもっている魅力を、丁寧に教えてくださいませんかと思っております。斯くいう私も、いろいろな本に出会えるいい機会となっており、いつも子供達以上に楽しみにしています。

さて、そんな魅力いっぱいの本を、もっともっとみんなに楽しんでもらいたい、という思いから、今年度は児童会の文化部が中心となって、本の読み聞かせを始めました。月に一回のペースで、自分たちのオススメの本や季節に合った本などを選び、朝読書の時間を使って取り組んでいます。慣れない活動に、初めはとまどう姿も見られましたが、回を重ねるごとに読む子どもも聞く子どもも楽しんで進められるようになりました。中には、「次の読み聞かせはいつやりますか?」と聞きにきてくれる子も…。こういった活動を、今後も子供達と一緒に計画して行い、本に触れる機会をさらに増やしていければと考えています。

そして次年度も、湧学館職員の方々と連携を取りながら、子供達が意欲的に読書活動を行っていただけるよう、環境整備にも努めていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



▲南京出前図書館 (©2014.12.18 ©2014.10.7)



京極読書新聞は
毎月1日発行予定です。

2ページ目に続きます

京極小学校

京極小学校の図書委員会は、校内のみんなに本に親しんでもらうために、今年度、色々な取り組みをしてきました。

まず1つ目は、図書室の環境作り。本を種類別に整理し、並べるところから始めました。湧学館でつけて頂いた背表紙のラベルをもとに仕分けることで、委員会の子どもたちは、色々な本に触れることができましたようです。おかげで、当番活動以外の日でも図書室に来て、本を整理したり、興味を持った本があれば手にして読んでみたりと、委員として図書室の雰囲気作りを自然と行ってくれています。

2つ目は、「おすすめ本の紹介カード作り」です。1年生から6年生まで、それぞれが興味を持つような本を委員会を選び、本のおもしろい所をイラストを交えながらカードに書き込んでいきます。そのカードが取り付けられた本を目立つところにおくと、「読んでみようかな。」という気持ちをかきたてるようで、手に取り、カウンターで貸出の手続きを取ってくれることが多くなりました。

3つ目は、「本のお楽しみ袋」です。こちらは、私が以前受講した研修会で紹介されたものを本校でも取り入れてみました。事前に委員会の子たちが本を選び、袋に1冊入れておくのですが、貸出の手続きをとるまで、袋の中身を見ることが

新川 志帆 (しんかわ しほ)



▲「おすすめ本の紹介カード」

できません。どんな本が入っているかというワクワク感を持たせたり、今まで読んだことのない本を読んでみたいと思う子にとっては、あたらしいジャンルと出会うきっかけ作りでもあるようで、とても好評でした。

今年1年間、湧学館の皆さんの心強いサポートにより、子ども達と共に楽しく活動し、運営することができました。これからも、本のもつ魅力をたくさんの子に届けることができるよう、活動していきたいと思えます。

京極中学校

京極中学校の図書コーナーは、委員会活動の一つである学芸委員によって運営・管理されています。今回は、その生徒たちの活動や本に対する思いをご紹介しますながら、一年間を振り返りたいと思います。

学芸委員は、新しい本が入ったり、たくさん本を借りてもらえたり、多くの人に本の良さを知ってもらえたりした時、喜びを感じ、それぞれが自分の仕事にやりがいを見つけ、日々活動しています。昼休みの貸し出し業務の他、みんなに気持ちよく利用してもらえよう、日頃から本の整理をしたり、お勧めの本をポスターでお知らせしたりしています。生徒たちに人気がある本は、ドラマ化や映画化されたものだそうです。新刊が入ると図書コーナーの利用者が増え、新しい本を楽しみ

高橋 和香子 (たかはし わかこ)

にしている様子が伺えます。また、京極中学校の図書コーナーは本を借りるだけでなく、放課後は学級活動の作業をしたり、先生に勉強を教えてもらったり、迎えが来るまで本を読んで待ったりする場としても利用されています。ちなみに、湧学館の利用の仕方を聞いてみると、京極中学校の生徒は本を借りる以外に、勉強をしにしている人たちが多くいるようです。そして、学芸委員は、本とは、知識を身につけて自分を成長させてくれるものであったり、人の考えの記録でありそれを伝えていくことが勉強になると考えたりしています。このように、本に対して興味を持って活動している生徒たちが、一年間、京極中学校の図書コーナーを支えていました。



▲ 京小5年生出前図書館 (2014.5.20)



▲ 京小2年生出前図書館 (2014.7.15)

「製本教室」 始まる…

今年度は、見開き80センチを超える巨大本！

講師：新谷保人（京極町湧学館）

平成27年2月28日（土）第1回
3月14日（土）第2回
3月28日（土）第3回

今年度10周年を迎えた湧学館。その10年の蓄積を活かして、今年の製本教室は、北海道新聞をはじめ、朝日・読売・毎日の各新聞の郷土欄を切り取り（写真①）1冊にまとめた大きな本をつくります。

2月28日（土）、第1回では、今年の1月から切り貯めてきた「北海道新聞」2004年11月～2007年12月分を38冊の本に、「読売新聞」「毎日新聞」2004年11月～2007年12月分を38冊の本に作り変えました。

まず、束ねた新聞紙の背に刻み目を細かく入れて行きます。（写真②）背に凹凸ができれば、そこにビニール糊を入れて本の形に整えてゆくのですが、この糊、乾くのに一晩かかります。でも、乾いたら最後、もう二度と剥がれないという製本専用の強力糊でもあるのです。1冊の本ができるまでにはいくつかの行程がありますが、1日で本の形に仕上げるといふのは不可能です。一昼夜、糊が固まるのを待たなければいけないような「間」が必ず入ってきますので、それで、湧学館の製本教室も3回に分かれています。

一度失敗すると、二度と替えのない素材なので緊張もしますが、それだけにできあがった時の喜びも大きいものです。暖かい春になったら、ぜひ湧学館の新蔵書を見に来てください。

十年前、あなたは何をしていました？ たとえば「2004年」は、駒澤大学苫小牧高校が甲子園で日本一になった年。この頃生まれた我が子の名前に「まさひろ」も一応考えたなあ…とか、この



本をばらばらめくっていると十年前のあの日がよみがえってきます。調べものばかりが郷土資料じゃありません。ゆっくりページをめくっていると、思いもかけない商品アイデアが生まれたり、完全に忘れていた懐かしい人の記事を偶然見つけたりするかもしれませんよ。

山麓文学館の変化球 倶知安風土館で 「倶知安と文学」をやってみました!

平成27年1月17日(土)

第1回 「倶知安駅」 石川啄木～有島武郎～林芙美子
平成27年2月14日(土)

第2回 「協方・胆振線」 沼田流人～大森光章 ほか

講師：新谷 保人（京極町湧学館）

第1回講演では、石川啄木～有島武郎～林芙美子の作品を通じて、文学史上に「倶知安」という名が生まれる瞬間をふりかえってみました。より正確に言いますと、この「倶知安駅」は、私鉄「北海道鉄道」（現在の函館本線）上の「倶知安駅」です。函館と小樽を結ぶ鉄道の途中駅ですので、どうしても作品は東京からの来訪者という形を残しています。

この時代が大きく変わるのが第2回。講演では、沼田流人～大町桂月～小林多喜二～大森光章をひいて、「東倶知安線」（後の国鉄「胆振線」

です）が接続した時代からの倶知安を描いてみました。特に、沼田流人～大森光章という、倶知安ならではの風土が生み出した作家の作品を大きく取り上げました。

「倶知安駅」を隠れたテーマに話したのには理由があります。それは、何十年に一度といった大変化が今後倶知安の街に予想できるからです。それは、北海道新幹線が停まる街としての「倶知安」ということなのですが。講演は、せめてその時代くらいまでには耐えうるだけの言説でなければならぬと考えて話しました。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

